

ガンゼル『ウェイブ』試論

—教室の日常に潜むファシズム—

木本 伸

要約（作品が問いかけるもの）

本論は1998年に公開されたドイツ映画『ウェイブ』¹⁾の作品解釈を行なう。初めに作品の内容を確認しよう。主な舞台はベルリン郊外のギムナジウム。学校の周辺には緑に恵まれた閑静な住宅地が広がっている。この地域に住むのは比較的裕福な人々だ。主人公はライナー・ヴェンガー。ギムナジウムで政治学と体育を担当する教師である。彼は学校の同僚でもある妻と2人で、湖畔のボートハウスで暮らしている。この湖で泳ぐのが彼の毎朝の習慣である。ライナーは水球部の監督でもあり、この映画では至るところで水のモチーフが現れることに注意しよう。²⁾ さて彼らの学校では、政治学をテーマとする一週間のプロジェクトが予定されていた。ライナーが受け持つのは独裁制のクラスだ。このクラスの活動は生徒たちの発案によりウェイブと命名される。ところが実践的に政治学を学ぶうちに、教師と生徒たちは次第に教室の枠をこえて、独裁的な政治集団へと変容していく。そして最後の日、プロジェクトは破滅的な結末を迎えることになる。

この物語には原史がある。アメリカ・カリフォルニア州の高校で1969年に行なわれた「第三の波」(The third Wave)という名の教室実験がそれだ。³⁾ この実験は高校教師の手記をもとに小説化され、特にドイツでは主に授業の教材として広く受け入れられてきた。⁴⁾ この小説に関する研究書や補助教材なども少なくない。そのため映画館の切符売り場には教師に引率された生徒たちの姿が目立ったという。つまり、この作品は周知の問題作の映画化だったわけだ。こうした経緯からドイツの批評は原作との比較に終始するものが少なくなかった。⁵⁾ それは著名な作品の映像化において避けられないことなのだろう。

それでは、この映画は1969年のアメリカから2008年のドイツへと単純に舞台を移し変えただけなのだろうか。どちらも主体となる生徒たちが、ファシズムとは無縁な生活を送っていたところは共通している。ただし両者には違いもある。カリフォルニアの高校生たちはナチスの残虐を示す記録映画を見て激しい衝撃を受けるが、スクリーンの中のドイツの若者たちは、このテーマには食傷気味だ。ドイツではどんな日も、マスメディアでナチ

ズムやホロコーストをめぐる言説が絶えることがない。プロジェクトの初日にある生徒が口にするように、「第三帝国かよ、もういい加減やめてくれ」(Drittes Reich! Nee, nicht schon wieder.)というのが、彼らの本音だろう。別の生徒が証言するように、現代のドイツでは世代を問わず「この問題については、もう十分に教えられている」(Dazu sind wir viel zu aufgeklärt.)のだ。

またナチズムが勢力を伸ばした時代と現代を比べるならば、社会状況に大きな違いがあることも見落とせない。第一次世界大戦の敗北とそれに続くヴェルサイユ体制は、ドイツに歴史的な恐慌をもたらした。それがナチズムの拡張に手を貸したことは、よく知られている。しかし物語の背景をなすベルリンの郊外には、豊かな生活が広がっている。若者たちはブランド物で着飾り、クルマを乗り回し、違法な薬物にまで手を延ばしている。ここではグローバリゼーションによる格差の拡大などはスクリーンから意図的に捨象されているようだ。つまりこの作品に登場する若者たちは、そもそも独裁制に養分を与える社会的不満とは無縁であり、さらに独裁制に対する歴史的免疫にも恵まれている。以上をまとめれば、彼らは考える限り専制的な政治体制から遠いところにいるといえるだろう。

それではこのような状況において、なおも独裁は可能なのだろうか。ここに本作品の挑発的な問題提起を認めることができるだろう。⁶⁾ この問いに対して映画の制作者たちは不気味にも「然り」と答えている。ただし、その理由は言葉では説明されない。ただカメラは現代の風俗に即して若者たちの姿を映し出していくのである。

政治への意欲

映画の始まりを告げるのはラモーンズ(Ramones)の*Rock'n Roll High School*だ。スクリーンには学校に向かうクルマの中で、ロックのリズムを刻むライナーの姿が映し出される。彼が身に着けるのはラモーンズのロゴが入った黒いTシャツとジーンズ。学校にクルマを乗りつけ、生徒や同僚たちと挨拶を交わす姿も底意がなく、さわやかだ。その姿は社会の権威なるものを頭から否定している。この日は金曜。来週からは政治学のプロジェクト学習が始まる。そのテーマは独裁制(Autokratie)と無政府主義(Anarchismus)の2つである。しかし、主人公の教師は自分が担当するのは無政府主義だと決め付けていた。教職に就く以前、彼はベルリンのクロイツベルク地区で左翼活動に関わっていた。現在も生徒とは「おれ」「おまえ」(duzen)で呼び合い、兄のように慕われる存在だ。いわば独裁制に付き物の権威とは無縁なタイプといえるだろう。つまり無政府主義の担当者として「俺よりも向い

ているやつが他にいますか」(Wer also ist besser geeignet als ich?)というわけだ。

ところが金曜の朝、彼は校長に呼び出されて独裁制を担当するように告げられる。無政府主義については、政治学の同僚であるヴィーラントがすでに準備を済ませているというのだ。この同僚はスーツにネクタイ、会話の端々にラテン語の警句を散りばめるといった典型的な教養俗物である。授業でも黒板いっぱい板書して、圧倒的な知識量で生徒たちを苦しめる。いわばライナーとは対極的なタイプといえるだろう。主人公は望みを断ち切れずにテーマの交換を持ちかけるが、すげなくラテン語で拒否される(「賽は投げられた」*Alea jacta est*)。こうして彼は意に反して独裁制の授業を引き受けることになったのである。

ところが月曜の朝、教室に入ったライナーは集まった生徒の多さにおどろく。「ほんとうの話、独裁制に興味のあるやつがこんなにいるなんて、おどろいたよ。俺なら無政府主義を選ぶな。」(*Ehrlich gesagt wundere ich mich, dass so viele sich für das Thema Autokratie interessieren. Ich hätte an eurer Stelle lieber Anarchie genommen.*)ヴィーラントの授業なんか受けたくないという生徒の返答が示すように、それはプロジェクトのテーマではなく、学校の人気教師を目当てに集まった生徒たちだった。彼らの顔ぶれは多彩である。学校のヒロイン、カロ。彼女の従者リーザ。カロの恋人で水球部のマルコ。人権の擁護者モナ。大麻の常習者ケビン。トルコ人のジーナン。東ドイツ出身のデニス。そして、いつも仲間外れのティム。おそらく物語の展開に説得力を持たせるために、映画の制作者はクラスのメンバーに多様性を求めたのだろう。

とりあえずライナーは独裁制の定義から授業を始める(*Autokratie, was ist das?*)。しかし教師も生徒も気乗りしない。カメラは低いアングルから教室の様子を捉える。そこに映るのは机の上に乱雑に置かれたペットボトルのコーラ、パン、果物、そして思い思いの方向に座る生徒たち。まるで授業が始まったことに気づかぬように携帯電話を手にするものや、本を読み続けるものもいる。クラスの意欲の低さは覆いようもない。ところが生徒たちが第三帝国の話題に強い嫌悪感を示したとき、逆にライナーは初めて授業への意欲を覚える。

「ちょっと待て、かなりおもしろい問題だ。つまり君たちは、現代では独裁制などはありませんと考えるんだな。」(*Warte mal, ich finde es gerade interessant. Ihr seid also der Meinung, dass die Diktatur in Deutschland nicht mehr möglich wäre, ja?*) この問いをきっかけとして、物語は急展開していく。

すでに見たように、ライナーはかつて左翼の活動家だった。教師として模範的とはいえないその言動も、社会的主張の一種と見なすことができるだろう。そのような教師が黒板

を背にファシズムの説明をしても、つまらない授業になるのは当然である。そこで彼は体験型の授業を試みようと思いつく。つまり教室で独裁政治を実践しようというわけだ。「幸いにプロジェクトの一週間は好きなように構成してかまわないことになっている。」(Glücklicherweise können wir die Projekwoche so gestalten wie wir wollen.) これこそ天性の活動家であるライナーにふさわしいアイデアだった。この初日の授業の後半から、教室では Autokratie という中立的な概念よりも、第三帝国を連想させる Diktatur という言葉が好まれるようになる。それは学問から実践への変化を如実に示しているのだろう。ただし、この時点で主人公の教師がすでに独裁者への変貌を意図していたと見なすのは早計である。あくまでも彼は生徒たちの常識を挑発したいと考えたのだ。

まずライナーは教室の淀んだ空気を入れ替えるために 10 分間の休憩を命じる。退屈な授業から解放されて、生徒たちは活気を取りもどす。ところが、ふたたび教室に戻ったとき、彼らの机は整然と並べなおされていた。すべての机は教卓と平行に置かれ、教師と生徒はまっすぐに向き合うことになる。つまり生徒間の錯綜した関係は整理され、彼らの視線は正面の教師だけに向けられるのだ。ただし、この視線を維持するには、彼らの関心を惹きつける磁力が必要だ。その磁力とはカリスマに他ならない。そしてカリスマこそ、他の教師から際立つライナーの特徴だった。⁷⁾

独裁の展開

「独裁制を可能にする条件」(Grundvoraussetzung für ein autokratisches System)とは何だろうか。そう教師に問いかけられて、生徒たちは様々に答える。イデオロギー、監視と管理、社会的不満。どれも一理ある発言をしりぞけて、ライナーは「すべての独裁制には中心となる指導者が存在する」(Jede Diktatur hat eine zentrale Leitfigur.)と定義する。そしてクラスの決議によって、彼自身が指導者の役割を演じることになる。指導者には相応の敬意が払われねばならない(So eine Leitfigur verdient natürlich auch Respekt.)。そこで彼はプロジェクトのあいだ、自分を名字で「ベンガー様」(Herr Wenger)と呼ぶように要求する。指導者となった彼は直ちに教室の規則を定めていく。それらの規則はどれも具体的だ。イデオロギーのようなメタレベルの議論は避けて、すぐにも実行可能なルールが定められていくのである。

まずは授業中の言動について、次の3つの約束事が定められる。①机からすべてを片付けること(Nimmt alles von eurem Tischchen, alles!) ②許可されたものだけが発言すること

(Wer redet, ist nur derjenige, dem ich das Wort erteile.) ③発言するときは起立すること(Jeder, der redet, muss dabei aufstehen.)。この他にも正しい姿勢を保つことや、発言は要点を簡潔に述べることなどが求められる。これらを束ねるスローガンは「規律による力」(Macht durch Disziplin)である。まずは気ままな若者たちを規律の力で一定の方向に束ねようというわけだ。このようにして指導者を中心とした教室秩序が整えられていく。

第2のスローガンは「協力による力」(Macht durch Gemeinschaft)だ。ライナーは「協力すれば、俺たちはずっと強くなれる」(Aber gemeinsam, da wären wir viel stärker.)と生徒たちを励ます。彼らは成績でヴィーラントのクラスに負けないように、たがいに教え合うようになる。学校の外でも、不良少年に襲われたティムを仲間たちが救い出す。この出来事に、だれひとり友人のなかったティムは深く感動する。この後、彼はウェイブのもっとも狂信的な活動家となっていくだろう。こうして彼らはクラスの連帯によって学校という過酷な競争社会(Ellbogengesellschaft)を変えていくのである。

共同体を視覚的に特徴付けるものとは何だろうか。そうライナーは問いかけて、次に制服の導入を提案する。おどろきが走る教室で、リーザがためらいながら発言を求める。「私たちは毎朝、何を着ようかとストレスに感じている。もしも、みんなが制服を着ることになれば、そんな必要もなくなると思う。」(Wir alle stressen uns doch jeden Morgen damit, was wir anziehen sollen. Das wäre überhaupt nicht nötig, wenn wir alle dieselbe Uniform tragen würden.) これまで彼女はカロの影に隠れるように生きてきた。この発言からも、クラスのヒロインに対するリーザの引け目を読み取ることができるだろう。⁸⁾ このようにウェイブを支持するのは、実は学校の中でも比較的劣位に置かれてきた生徒たちだ。制服は集団に統一や平等をもたらす。それは彼らを劣等感から解放することになるだろう。⁹⁾ 白シャツとジーンズがウェイブの制服に定められると、その日の午後、さっそくティムは自宅の庭でそれ以外の衣類を燃やす。ナイキ、アディダス、ピューマなど、炎に包まれるブランドはナチスの焚書(Bücherverbrennung)を想起させる。その炎の向こうに、ティムは平等の共同体を見ていたはずだ。¹⁰⁾

第3のスローガンは「行動による力」(Macht durch Handeln)である。ライナーは生徒たちに実践的な計画を求める。教室はわき立ち、様々なアイデアが語られ、あちこちで拍手が起こる。ホームページやポストカードの作成が決まり、片手で波を描くような独自の敬礼が定められる。そして夜の街では、覆面をした若者たちが津波をかたどった彼らのロゴを違法にスプレーしていく。木曜の放課後、カロは教師に「事態はもう制御できない」(die

Sache ist nicht mehr unter Kontrolle)と忠告するが、ライナーは聴く耳を持たない。なぜなら彼も少しずつ独裁者の役回りが気に入り始めていたからだ。

異分子

教室に持ち込まれた規則や秩序は、生徒たちにとって初めての経験だった。クラスの中には、これを拒絶するものも現れる。しかし、このような異分子も独裁制は巧みに利用していく。

まず初日に反抗的な態度を見せたのはケビンだった。全体行動のために起立を求められた彼は、あからさまに不服従の態度を示す。これに対してライナーは「それなら出て行け」(Da muss du gehen.)と即座に命じる。いつもは気さくな教師の変わりように、不良少年の表情がこわばった。「俺はだれも強制しない。(…)ここでは、すべてが自由意志だ。だからケビン、かんたんな話だ。みんなと一緒にやるか、それとも出て行くかだ。」(Ich zwingen niemand. (...) Das ganz hier ist freiwillig. Kevin, das ist ganz einfach. Entweder du machst mit oder du gehst.) 物言いは柔らかだが、ここで保証される自由意志とは服従するか否かの二者択一でしかない。つまりケビンを利用して、ライナーはクラスの基本方針を示したのだ。彼の家の郵便受けには「くたばれブッシュ」(Fuck Bush)というビラが貼られていた。しかし教室での彼の態度は、イラク戦争で他国を敵味方に峻別したアメリカ大統領と大差ない。この初日の出来事はプロジェクトの今後を予兆している。つまり単純な二者択一(Entweder-Oder)で物事が進められていくのである。

プロジェクトの進行につれて、生徒の中には公然とライナーに反旗をひるがえすものも現れる。たとえば学校新聞の編集者であるカロとモナは前後してウェイブを離れ、独裁者に対する抵抗運動を組織する。水球の試合で彼女たちが観客席にビラを撒く場面は、明らかに白バラのゾフィー・ショルを連想させる。しかし教室の独裁化に抵抗する生徒は少数派だ。しかも敵の存在は組織の結束を高めるために利用される。クラスのヒロインであるカロの追放は教室に統一をもたらした。また下の教室で行われているヴィーラントのクラスをライナーは敵視する(unsre Feinde!)。そしてクラス全員で床を踏み鳴らし授業を妨害することで、熱狂的な一体感を生み出すのである。

独裁制には権力の集中や集団の均質化が欠かせない。そのための手段として、独裁者は外に敵を作り内なる異分子を摘発する。さしたる内実のない集団を維持するには、おそらくそれしか方法がないのだろう。日を迫うごとに「彼らは学校を俺たちとお前たちに分断」

(Sie hatten die Schule in Wir und Ihr eingeteilt.)¹¹⁾していく。この絶えざる自己拡大が独裁の存続を可能にするのである。

虚無への意志

ここで本論の出発点の問いに戻ろう。経済的に恵まれ、過去の歴史からも十分に学んでいるはずの若者たちが、独裁政治に加担することがありうるのだろうか。たしかに冷徹な競争社会では勝者と敗者が生まれる。そのため生徒の中には競争を否定するウェイブの思想に共感するものもいた。主人公であるライナーにも、正規の過程を経ずに教職を得た「半人前の教師」(der Schmalspulpädagoge)という引け目があった。このような劣等感が運動に一定の養分を与えたことは否めない。しかし、ドイツのような成熟した社会で狂信的な思想が根を張ることは困難だろう。一般にイスラム原理主義のような極端な思想は、個人の努力では現状を打開できない絶望的な社会で生育する。スクリーンの中の若者たちは、そうした絶望とは無縁である。そのため物語のリアリティを説明するには、単純な劣等感とは別の要因を探さねばならない。

ここで物語の書割に注目しよう。撮影に使われたのはベルリン郊外のマリー・キュリー・ギムナジウム(Marie-Curie-Gymnasium)。公募による設計で 2005 年に完成した学校である。¹²⁾ この建物の特徴は何よりもその開放感にある。ガラスを多用した建物は明るく衛生的で、教室や職員室には日差しがあふれている。¹³⁾ 校内の施設も機能的に配置され、およそ無駄がない。それは「新鮮な空気と光にあふれた印象で(...)一定の目的のために作られた典型的な現代建築の所産」(der Eindruck von viel Luft und Licht, (...) ein typisches Produkt moderner Zweckarchitektur)¹⁴⁾と言えるだろう。¹⁵⁾

実はこのような建築物は 20 世紀初頭から次第に増加してきた。そこには科学技術の進展による「人間的経験の貧困」(Armut (...) an Menschheitserfahrungen)が隠されているとベンヤミンは指摘する。¹⁶⁾ ゆっくり歩けば道ばたにも様々な発見があるだろう。しかしクルマや飛行機を利用すれば移動は無機質にならざるをえない。つまり技術の進展は生活経験を均質かつ無内容にするのだ。近代に特徴的な「思想の氾濫」(Ideenreichtum)は、このような生活経験の欠落を補うものだった。こうした時代にふさわしいのが「ガラス文化」(Glaskultur)である。なぜならガラスは中立的で、いかなる経験の痕跡も残さないからだ。透明なガラスは無内容かつ無根拠な現代人の生活を象徴している。その意味で美しく透明な建築物はニヒリズムの表現と呼べるだろう。

スクリーンに映し出される学校や街並みは清潔で透明な印象を与える。人々の生活は豊かで不自由がない。彼らの生活に共通するのは、経済力に裏打ちされた個人主義である。ティムの一家は世襲の別荘を持ち豪華な食卓をかこんでいる。しかし家族の会話はそっけなく、思春期の息子に関心を払うものはいない。ティムは教師のボートハウスに泊まり込み「どっちにしろ僕のことを気にする人なんかいませんよ」(Interessiert sich sowieso keiner für mich.)と釈明する。マルコにも「わが家」(Zuhause)がない。母親が白昼から酒を飲み、若い男を家に引き込むからだ。カロの弟レオンはタバコをふかし、それを注意するマルコに「お前には関係ないだろ」(Zumindest ist nicht deine Sache.)と言り返す。カロは母親に「レオンには、もう少し規律を教えた方がよかったかも」(Leon hätte ein bißchen Disziplin bestimmt nicht geschadet.)とつぶやくが、自由主義を重んじる両親が耳を傾ける気配はない。ある生徒は週末のパーティーの乱痴気騒ぎで、こう主張する。「そもそも現代に抵抗に値するものが何かあるのか。まともな価値なんか何もない。みんなの頭の中にあるのは自分の楽しみだけさ。」(Sag mir, wogegen soll man eigentlich heutzutage rebellieren? Es hat alles keinen Wert mehr. Jeder hat sein eigenes Vergnügen im Kopf.) このパーティーの場面は、実は原作小説には存在しない。つまり映画の制作者はこの場面を挿入することで、独裁制が発生するメカニズムを仄めかそうとしたのだろう。

このような生活に人々は満足しているわけではない。別の生徒は自分の生活をふり返り、こう証言する。「いつでも欲しいものは手に入った、服でもカネでも。だけど、たいていは退屈していた。」(Einmal hatte ich immer alles, was ich wollte, Klamotten, Geld, usw. Aber was ich am meisten hatte, war Langeweile.) ここで語られているのは消費社会の巨大な空白である。そして、この空白に忍び込んだのがウェイブだった。¹⁷⁾

「人間は目標を必要としている。そして人間は何も欲さないくらいなら虚無を欲する。」(er braucht ein Ziel, und eher will er noch das Nichts, als nicht wollen.)¹⁸⁾ もしも、この映画の冒頭に言葉を掲げるなら、このニーチェの主張ほどふさわしいものはないだろう。独裁制は若者たちに集団の喜びを教えた。イェンスという若者はこう言う。「ウェイブは僕たちに生きる意味を与えてくれた。それは、つらぬき通すだけの価値のある理想だ。」(Die Welle gibt uns eine Bedeutung. Ideale, für die es sich lohnt einzustehen.) しかしカロの目には、同じ事態がこう映る。「まるで不気味なエネルギーに引きさらわれるように、突然、みんなが一緒に動き始めた」(Alle haben plötzlich voll mit gemacht, so wie eine unheimliche Energie jeden mitgerissen hat.)。教室に掲げられた3つのスローガンが、どれも「力」(Macht)を目指して

いたことに注意しよう。力はさらなる力を目指して拡大し、それによってのみ維持される。この自己拡大の幸福感(Euphorie)には、しかし虚無が隠されていたのだ。¹⁹⁾

破滅

教室の枠を越えてウェイブは拡大する。学校ではクラスや学年を問わず白シャツとジーンズの生徒が目立つようになり、水球の試合会場ではウェイブ式の敬礼を拒むものは入場を拒否されるようになる。その不気味な力は「波のように街を飲み込んで」(Wie eine Welle wird es [unser Zeichen] die Stadt überrollen.)いく。次第に目的が手段を正当化し、若者たちは暴力や違法行為にも親しむようになる。しかし、ふくらみ続ける風船はいつか破裂するしかない。その後に残るのは風船の残骸と空虚でしかないだろう。

ウェイブが暴力の装置と化したことを知ったライナーは、プロジェクト学習を終えた土曜の正午、生徒たちを学校の講堂に集める。一糸乱れぬ敬礼で壇上の指導者を迎える彼らの様子は、ファシズムの完成を示している。ここでライナーは一大の芝居を打つ。彼は取り憑かれたような様子で独裁者を演じ、裏切り者を告発し、集団のエネルギーを燃え上がらせる。そして、その頂点において彼はこれこそファシズムであるとさとし、運動の解散を宣言する。散発的に抗議の声もあがるが、ほとんどの生徒たちは深く落胆して席を立とうとする。そのときティムが拳銃を振り上げ、全員にその場に止まるように命じる。しかし、もはや事態を止めることはできないことをさと、彼は頭に弾丸を撃ち込み自死してしまう。

この物語の犠牲者として、ティムほどふさわしいものはなかつただろう。裕福な家庭の子息でありながら、彼は愛情に恵まれず、友人も持たずに育った。ウェイブに初めて自分の居場所を見つけたとき、彼が熱狂的な支持者となったことは容易に理解できる。ティムの自尊心は活動の拡大とともに成長した。そのため運動が終息を迎えたとき、みずから命を絶つより他に彼に道は残されていなかった。²⁰⁾ 死の寸前に、ティムは涙を流しながら「ウェイブは僕の命だった」(Die Welle war mein Leben.)とうめく。しかし、その命とは独裁制の実験室で生まれた泡に過ぎなかった。ティムの悲劇は、この物語にとって必然的な結末だったのだ。

最後の場面は、一連の事件の首謀者として学校から連行されるライナーの姿を映し出す。彼は茫然として、まだ何が起きたのか理解できない様子だ。冒頭の場面で、ロックのリズムに乗って学校にクルマを乗りつけた彼が、最後の場面では手錠をかけられて学校から連

れ去られていく。この対照的な枠構造において、主人公は自由から破滅への暗転を経験した。それは悲劇的な没落と呼べるだろう。しかし日常に虚無をひそませる限り、ティムやライナーの運命は形を変えて、私たちにも起こりうることもかもしれない。この映画は自由と繁栄をとげた社会に、そのような巨大な問いを突きつけているのではないだろうか。²¹⁾

本論は日本独文学会中国四国支部研究発表会（2011年11月5日、高知大学）および日本独文学会春季研究発表会（2012年5月20日、上智大学）で口頭発表した原稿に加筆したものである。以下の注における Web データは2012年3月20日現在のものである。

¹⁾ 使用したソフトは次の通り。デニス・ガンゼル（監督）：THE WAVE ウェイヴ（アットエンタテインメント）2010年。107分。原題は次の通り。Dennis Gansel (Regie) : Die Welle. 2008. 映画からの引用は筆者の聴き取りによる。

²⁾ 原作小説では独裁制の進展において学校のアメリカン・フットボール部が重要な役割を果たすが、映画ではそれが水球部に置き換えられている。例えば物語の後半で、生徒たちが暴徒化するのは水球の試合会場である。いわば水に秘められた一体的な力が、消費社会の個人を全体主義へと引きさらう力の比喩とされているのだろう。水の隠喩については次のような指摘もある。「若者の足下には確固とした大地が欠けている。彼らの生の要素は水である。若者は手足をばたつかせ、水を漂うのだ。」 Vgl. Maximilian Probst: Macht durch Handeln! In: Die Zeit, 13. März 2008. <http://www.zeit.de/2008/12/Film-Die-Welle>

³⁾ 「第三の波」が特異な教室実験であることは確かだが、このような授業形態は「体験による学習」(John Dewey: learning by doing)を標榜するアメリカの学校では、それほど珍しいことではないらしい。Vgl. Frauke Frausing Vosschage: Erläuterungen zu Morton Rhue: Die Welle. Hollfeld (Bange Verlag) 2004. S.76.

⁴⁾ 以下にこの映画の原史をまとめる。1969年にカリフォルニア州パロ・アルト市(Palo Alto)のカバリー高校(Cubberley High School)で歴史教師ロン・ジョーンズ(Ron Jones)により独裁制を模した教室実験が行われた。このときの模様は1972年に教師自身により「第三の波」(The Third Wave)という表題の記事にまとめられている。また1981年に彼は同題の短編を発表し、これにもとづきアメリカのテレビ局がドラマを制作。同年には少年文学の作家として知られるトッド・シュトラッサー(Todd Strasser)がモートン・ルーの作者名で小説を発表している。Morton Rhue: The Wave: The Classroom is out of Control. London (Puffin) 2007. 1984年にはドイツ語訳が刊行されている。Morton Rhue (übersetzt v. Hans-Georg Noack) : Die Welle: Bericht über einen Unterrichtsversuch, der zu weit ging. Ravensburg (Ravensburger Verlag) 1997. なお今回の映画の広報活動には、かつての歴史教師ジョーンズも参加している。彼によれば、この映画の内容は彼の経験に「驚くほど近い」(unglaublich nahe)という。Vgl. Wikipedia: Die Welle (2008) [http://de.wikipedia.org/wiki/Die_Welle_\(2008\)](http://de.wikipedia.org/wiki/Die_Welle_(2008)) なお映画の公開後にはノベライズ作品も刊行されている。Kerstin Winter: Die Welle, der Roman nach dem Film von Dennis Gansel. (Ravensburger Verlag) 2008.

⁵⁾ 例えば以下の批評は平和裏に運動が解散する原作に対して、流血の惨事に至る映画の結末を過剰だと見なしている。これなども原作に引きずられた見方だろう。これに対して本論では、この結末には論理的必然性があることを示したい。Vgl. 1. Tobias Kniebe: Der Faschist in uns. In: Süddeutsche Zeitung, 12. März 2008. <http://www.sueddeutsche.de/kultur/im-kino-die-welle-der-faschist-in-uns-1.282155>. 2. Andreas Kilb: Kinofilm „Die Welle“ Auf Wiedersehen, Kinder. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung, 13. März 2008. <http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/kino/kinofilm-die-welle-auf-wiedersehen-kinder-1515359.html>

⁶⁾ 然るべき条件が整えば、現代の市民もナチスのような独裁体制を支持することがありうるのだろうか。これは現代ドイツでは、文学や映画などのフィクションにおいて、よく追求しうるテーマだろう。なせなら、わずかなりともナチスでありうる可能性を認めることは、公人として自己否定を意味するからだ。ライナー役のユルゲン・フォーゲルは悪役の名優として知られているが、彼でさ

え南ドイツ新聞とのインタビューで「もしもヒトラーの時代であれば、あなたはどうなっていたと思いますか」と問われて、戸惑いを隠せないでいる。「ユルゲン・フォーゲル：(笑いながら)それはだれも本気では答えられませんよ。どんな条件化でも自分なら抵抗運動の闘士だったでしょうという返事を要求するような質問ですね。」Vgl. Interview mit Schauspieler Jürgen Vogel: Wer wären Sie unter Hitler gewesen, Herr Vogel? In: Süddeutsche Zeitung, 19. Februar 2008. <http://www.sueddeutsche.de/kultur/interview-mit-schauspieler-juergen-vogel-wer-waeren-sie-unter-hitler-gewesen-herr-vogel-1.628859>

⁷⁾ 多くの批評が一致しているように、教師ライナーにユルゲン・フォーゲルは打って付けの配役だった。社会に対する反権威でありつつ自ら権威として人々を惹きつける存在感が、この俳優にはあるからだ。「権威と反権威、命令に服従する喜びと権力の軽蔑、教師でありつつ社会的逸脱者、おそらくフォーゲルはこうしたものを同時に求めうる唯一のドイツ人俳優だろう。」Vgl. Andreas Kilb, a.a.O.

⁸⁾ 原作小説のアミー (=リーザ) とローリー (=カロ) の関係について、Löw/Poppe は次のように指摘している。「アミーは自分の存在がローリーの陰に隠れていることを知っている。彼女は他の誰よりもそのことを意識しており、嫉妬と悪意から友人の激しい敵対者となるのである。」David Löw / Reiner Poppe: Morton Rhue: Die Welle. Kommentare, Diskussionsaspekte und Anregungen für produktionsorientiertes Lesen in der Sekundarstufe 1. Hollfeld (Joachim Beyer Verlag) 1996. S.37f.

⁹⁾ 後にトルコ人のジーナンは次のように証言している。「もはや民族、宗教、社会層などに意味はない。僕たちはみんな同じ運動のメンバーなのだ。」(Herkunft, Religion, Soziales spielen keine Rolle mehr. Wir gehören alle einer Bewegung an.) このように彼らは均質な集団に属することに喜びを覚えるようになる。

¹⁰⁾ 小説中のロベルト (=ティム) はクラスの「負け犬」(Loser)からウェイブの幹部へと変貌する。それを可能にしたのは、Ellenrieder によれば「ウェイブの平等思想がそれまでの成績を根拠とする学校の競争風土を全面的に排除したから」である。しかし彼は運動の終焉とともに没落する。この変転ゆえにロベルト (=ティム) は「読了後に読者をもっとも深く思索へと誘う人物像」といえるだろう。Vgl. Kathleen Ellenrieder: The Wave. Lektüreschlüssel. Stuttgart (Reclam) 2004. S.22f. S.32f.

¹¹⁾ Kerstin Winter, a.a.O. S.139.

¹²⁾ 映画の舞台となったマリー・キュリー・ギムナジウムの沿革等は、この学校のウェブサイトによった。 <http://www.marie-curie-gymnasium-dallgow.de/>

¹³⁾ この校舎の明るさは映画の撮影時期とも関係しているだろう。この映画は 2007 年 7-8 月の 38 日間で撮影された。夏休み中の学校の生徒たちもエキストラとして多数参加したという。Vgl. Wikipedia: Die Welle (2008) A.a.O.

¹⁴⁾ Kerstin Winter, a.a.O. S.8

¹⁵⁾ ガンゼル監督は撮影場所として「かつてナチスの授業が行われたような印象を与えることがなく、ヴィルヘルム時代の何ものも感じさせないような現代的な校舎」を求めたという。Vgl. Wikipedia: Die Welle (2008) A.a.O.

¹⁶⁾ Walter Benjamin: Erfahrung und Armut. In: Texte zur Literaturtheorie der Gegenwart. Hg.v. Dorothee Kimmich u.a.. Stuttgart (Reclam) 2003. S.122-128. ヴァルター・ベンヤミン (浅井健二郎編訳): 経験と貧困。『ベンヤミン・コレクション 2, エッセイの思想』所収 (ちくま学芸文庫) 1996. 371-384 頁。

¹⁷⁾ 原作小説から得られる「結論」のひとつを Vosshage は次のようにまとめている。「豊かな社会の若者たちは、彼らの野心や欲望や理想が巧みに操られるなら、経済的な苦しみのために順応する若者たちよりも (ファシズムの) 誘惑や集団の心理的抑圧に対して抵抗力があるわけではない。」Frauke Frausing Vosshage, a.a.O. S.82.

¹⁸⁾ Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe. Bd.5. Hg.v. Giorgio Colli u. Mazzino Montinari. München (dtv) 1988. S.339.

¹⁹⁾ ウェイブには明確な主義や信条がない。彼らの湖畔でのパーティーは異様な昂揚感につつまれるが、そこでは湖で死んだ自殺者たち「さまよえる 6 人の物語」(die Geschichte von sechs Wanderern)が、まことしやかに語られる。ベンヤミンは「人間的経験の貧困」による近代の「思想の氾濫」の例として、占星術や手相術や交霊術をあげているが (注 16 参照)、ここに彼らのオカルト趣味を加えてもいいだろう。このオカルト趣味はウェイブの内実の空虚さを示している。

²⁰⁾ 原作小説のロベルト (=ティム) について、Vosshage は次のように述べている。「今や彼はウェイブによって人生の意味と目的を知った。(…) 実験の終結は事実、彼にとって衝撃であり、新しい自己の喪失を意味するだろう。彼は (ウェイブによって) もっとも多くのを手にし、もっとも多くのを失ったのだ。」Frauke Frausing Vosshage, a.a.O. S.63. ただし小説中のロベルトは自殺には至らない。彼は深い失意に落ちて、教師に抱かれるように講堂を去っていく。

²¹⁾ 豊かな社会の個人が抱えるところの空白は、独裁制へと帰結する可能性を秘めている。この仮説は日本のオウム真理教によって部分的に実証されたとはいえないだろうか。たとえば次の論考は、オウム真理教という事象を生み出したのは「生の名状し難い空虚に苛まれていた若者」だと指摘している。「生のどこにもめりはりのきいた不幸や苦難がないということ (…)

このことが、オウムへと参加する選択を規定しているのだ。」大澤真幸：虚構の時代の果て (筑摩書房) 2009. 185 頁。同じことは地下鉄サリン事件の直後において、すでに次のように直感されていた。「ひとは、自分は何のために存在し何のために苦しむのか、考える。生死の問題について、考える。政治や経済や社会システムはこれに応えることはできない。この問題は、個々の魂に任されているからだ。(…)

豊かになって明日の食事の不安はなくなった。国家が、〈追いつき、追い越せ〉と個人を駆り立てることもなくなった。社会・経済システムは日々、正確に動いている。しかし、自分という存在について、何ともいいようのない不安が生まれている。学校も会社も、この不安には答えない。学校も会社も手段や方法であって、目的ではないからだ。戦後、日本社会に生まれた様々な社会運動も、国家の規制からの個人の自由を求め、解放を求めたのであって、自由になった個人が、実は空白であることなど考えてもいなかった。」『世界』編集部：サリン事件と不安の時代 [岩波書店『世界』1995 年 5 月号, 22-23 頁] 23 頁。

Ganzels *Die Welle*

Zum Faschismus im Alltag des Klassenzimmers

Shin KIMOTO

Im Film *Die Welle* (2008) von Dennis Ganzel handelt es sich um die dramatische Geschichte einer Schulklasse, in der ein Schulprojekt zur Politikwissenschaft über den Faschismus stattfindet. Dabei war eigentlich beabsichtigt, dass die Schüler die Vorteile des demokratischen Politiksystems erkennen sollen. Der Lehrer und die Schüler geraten jedoch im Verlauf der Projektwoche trotz ihrer anfänglich geäußerten Abneigung gegen den Faschismus in dessen Bann. Diese Bewegung aus dem Klassenzimmer wird auf Vorschlag der Schüler selber "die Welle" genannt. Sie bestimmen auch die Uniform von weißem Hemd und Jeans und außerdem die Begrüßungsform untereinander. Das hier Erlebte greift gleichsam wie eine große Welle außerhalb des Unterrichts um sich, so dass Unbeteiligte in der Schule von Seiten der Wellen-Schüler belästigt werden. In dieser Zuspitzung der Verhältnisse versammelt der Lehrer als Führer der Welle die Schülerschaft in der Aula, um den Schluss der Bewegung zu proklamieren. Ein Schüler, Tim, rebelliert jedoch mit einer insgeheim eingeschmuggelten Pistole dagegen. Nach einem erfolglosen Versuch der Überredung zur Fortsetzung der Bewegung erschießt er sich mit den Worten: "Die Welle war mein Leben." Diese Geschichte einer Klassenkatastrophe war deutschen Zuschauern in der Vorlage, Morton Ruhs Novelle *The Wave. Classroom is out of control*, die in Deutschland als Lektüreempfehlung für die Sekundarstufe vielfach verkauft wird, schon bekannt. Die Novelle basiert bekanntlich auf einer realen Begebenheit im Jahr 1969 an einer High School im kalifornischen Palo Alto. Die Filmkritik neigte deshalb meist dazu, in Ganzels Werk nichts Weiteres als die bloße Verfilmung des Vorläufers zu sehen. In diesem Filmwerk wird jedoch eine aktuelle Frage gestellt, die man damals in Kalifornien wohl nicht kannte: ob der Faschismus bei darüber aufgeklärten Menschen im Wohlstand überhaupt noch eine Chance hätte. Die Schüler in Palo Alto sollten sich gegenüber den Grausamkeiten der Nazis, die sie im Geschichtsunterricht erfuhren, unwissend und schockiert zeigen, während die deutschen Schüler im Film die Holocaust-Problematik schon satt haben, wie einer von ihnen am ersten Tag des Projektes aussagt: "Dazu sind wir viel zu aufgeklärt." Außerdem sind die Jugendlichen auf der Leinwand meist aus

reichem Elternhaus, was mit der ökonomischen Misere in der Weimarer Republik wenig zu tun hat: Im Umfeld der Schule, in dem sich die Vorgänge des Films überwiegend abspielen, führt man nämlich fast ausnahmslos ein Leben im Wohlstand. Um so herausfordernder klingt wohl die Frage des Lehrers Schülern gegenüber vor dem Beginn des Klassenexperiments: "Ihr seid also der Meinung, dass die Diktatur in Deutschland nicht mehr möglich wäre, ja?" Darauf gibt der Filmemacher eine unmissverständliche Antwort mit den Sequenzen, die anschaulich machen, wie leicht sich in der Konsumgesellschaft ein psychisches Vakuum in jugendlichen Seelen bilden kann. Dieses Vakuum der Seelen will sich im Film mit dem Faschismus ausfüllen, was der Lehrer mit seinem Charisma verwirklicht. Ein Vorbild dieser Art von Schülern gibt uns Tim, der in der Klasse lange nur als Versager galt. Mit der Teilnahme an der Welle erlebt er jedoch wahrscheinlich zum ersten Mal in seinem Leben Lebensorientierung und Machtbewusstsein, was ihn zum fanatischen Anführer der Bewegung macht. Diese Erfahrung wird für Tim zum zentralen Erlebnis, wie sein Testament bestätigt: "Die Welle war mein Leben." Beim Zusammenbruch der Wellenbewegung in der Aula-Szene gibt es für ihn darum keine Alternative mehr als Selbstmord zu begehen. Der Film deutet an, wie sich der Faschismus auch heute im Wohlstand gut verbreiten könnte.